

◆◇◆ 歯科はビタミンも主食も足りていない ◆◇◆

日本医師会の2008年度医療政策シンポジウムのパネルディスカッション(※)において、吉川洋東京大学教授が「社会保障費が削られたから急性期医療の崩壊を招いたという論法は理解できない。私の目には、医者が特定のビタミンが不足している患者に“食費を増やせ”と言っているように映る」と述べたことに対して、日医の中川常任理事は「医療機関の健全経営は、質の高い医療を提供するための最低限の前提」「われわれに足りないのは“特定のビタミン”ではなく主食だ」と反論した。

吉川洋教授といえば、福田内閣時代に社会保障国民会議の座長を務めた方である。こともあろうに医者に対してビタミンという喩えを用い、またよりによってこれが社会保障国民会議座長の目である。

当然のことながら議論の対象にもなっていない歯科は、ビタミンも主食も足りておらず、いつ暴動が起きてもおかしくないくらいの飢饉に至っている。ところが暴動なんか起こる気配は一向になく、霞を食って生きているのか、自ら霞の如く消えてなくなるのを待っているのか、実に呑気な話である。

もう素人にだって分かっていることなので何遍も言う必要もないが、歯科が飢饉に至った理由のひとつが歯科医師過剰である。ビタミンの投与と言おうが、メリハリのついた財源配分と呼ぼうが、結局のところ代わり映えのしない個人診療所だらけでは、主食の量に事欠けば、集約化でも行って糊口を凌ぐ他に術はない。

集約化というのは余剰設備の廃棄に始まるが、それは必ず人減らし、口減らしが付随する。集約化そして選択と集中が結果として望ましいものを提供することができるなら、それは全く構わないが、主食の量だけでなく質も今と同じままであるとするなら、幾人が雁首を揃えて居並ぼうと、何を選択し何処に集中しようと、実際には碌なものは提供できないであろう。すなわちこれも言うまでもないが低点数の問題である。

この未曾有の不景気に、再び5月危機だ何だともいわれて国民が奈落の底に落ちていく感もある中で、歯科の点数が倍増などは夢物語であるにせよ、また大幅な増点が患者負担増となってアクセスが激減するのも承知の上で、それでも或る程度のところまではお願いせねばならないことは歯科医なら皆が分かっていることである。主食の量の話ではなく質の話に至れば、闇米を売っているとか頂戴しているとかは語り尽くされたことである。

そして質の向上が受診率の減少に繋がるのであれば、矢張り歯科医は過剰である。需要の喚起ということが最も相応しくない職種であって、誰も全てが腹いっぱい食わせて欲しいと駄々を捏ねているわけでもない。

念を押せば、何処の何様が何と言おうが、食膳につく者の数は多過ぎるし、主食は足りていない。それでやれと言われたって、無理なものは無理なのである。しかし、ひもじさよりも疾しさが先にくるものだから、霞を食うか、闇米に手を出すかしかなくなっているのではないか。

歯科医師過剰に尋常ではない低点数。上げ膳据え膳との言葉があるが、誰かがどうにかしてくれるわけではない。冷や飯に臭い飯を与えられ、加えて箸の上げ下ろしまで御指導を受けるのなら、いったい何処の後進国の囚人であるというのか。

果てしない体たらくを露わにし、よくよく考えてもみれば、経済学の泰斗の悪口をいう資格など全くなかったのである。

(※) Medical Tribune 2009年4月23,30日号 P.73 参照

April 28, 2009 / R'R wrote